
別の世界

たか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

別の世界

【Nコード】

N6626W

【作者名】

たか

【あらすじ】

XXXX年

日本に住んでいた人はすべて異世界に召喚されてしまった。その出来事から3年過ぎ去ったころから物語は始まった。

プロローグ（前書き）

初めてのオリジナルです

広い心でこの小説を見ていただけたらな。と思っばかりです

まだ言葉の意味を全然知らない未熟者ですが、これからよろしくお
願いします。

プロローグ

XXXXX年

日本が異世界に召喚されて3年たった。

召喚された人は2種類、それと合わせて3種類の人々に分かれた。2種類は異世界に着いてから『能力』を持った者。持たなかった者そして3種類目は、そこで行動した者。付いていく者。動かずに死ぬか奴隷になる者。

行動したものは貴族になったり、権力所になった者もいる。一部は冒険者になったままの者もいるが。

次に、付いて行った者は、貴族になった男に付いた女の場合、性奴隷と同じ扱いをされ苦しみ続け。男の場合、重労働を強要される。

権力者になった者に付いて行った者は、男女ともに補佐官として就いていた。

最後に冒険者のままの者は付いて行った者と含め気楽に生きていた。

この世界では魔王と勇者が存在している。エルフだってドワーフだって暮らしている。

しかしここで3種類、人間、亜人、魔物3種族に分かれていた。戦争だっただけだ。

だが、勇者と魔王は争わず、勇者は人間を、魔王は魔物を、二人は亜人を護っていた。

亜人は一般的に人間と魔物には手を貸さず、勇者と魔王には手を貸すということになっていた。

そんな世界に住む一人の青年

彼に勝てる者はいない。

たとえどんな異常が起きても、どんな大国が攻めつけてきたとしても、神が殺しに来ても彼は負けない

彼は最初の最強で、最後の最強だから……

プロローグ（後書き）

誤字・アドバイスなどできればお願いします。

国の名前も主人公の名前も決まっています

1話(前書き)

気分で投稿します

この話もプロローグみたいなものですね。繋げたほうがいいですかね？

1話

2年前

ギルド

それは依頼をもらったり、冒険者たちが集う憩いの場所

たまにギルドの勢力を拡大させようとVSギルドをすることもある。そしてギルドには固有ギルドという制度があり、VSギルドを模倣的に試合をさせたりすることもある

固有ギルドは冒険初心者は皆やっていて、入ったギルドから無料もしくは激安で支援を受けれる

そのかわり、デメリットは大会に出るときにそのギルドの宣伝をしないといけないし、VSギルドなどの緊急時に来ないといけないこと、などがある。

なぜ説明しているのかと言うと、VSギルドという緊急時になった

夕方頃の時間、ギルド近くの時計塔の上で戦場を見下ろしながら彼は何かを考えていた

「ギルドそろそろ抜けようかなあ？」

このVSギルド本日3度目だ。

先に説明しておく、このVSギルドはランクが上がりたいやつらばかりが起こしていることである。ランクはGからSSS、Gでは今、最弱と呼ばれているウルフを倒せれば誰だつてなれる。

しかしSSSこれはただの看板、「これになりたい！」と言わせて冒険者にしようとしているのだ。なれる人は絶対にいない、証拠に予言の二つ名を持つSSランクの1人ミルさんも断言している
そういえば現在SSランク持ちは14人、いつか会えるかもしれないので紹介はしないでおこう

「時期的にも抜けておいた方がいいか、よし、ギルド抜けて静かに過ごそう」

「いい案だねお兄ちゃん！」

「うん？ああ、理彩か、もしかして今の聞いてた？」

突然声を掛けてきたのは妹の木立理彩^{「ただちりみ}、SSランクの一人で霧の姫君と呼ばれている。

ギルドの勢力のために理彩を置いていこうとしたが、聞かれていたら付いてきてしまう

「ん？聞いてたけど？」そうか。「…ねえお兄ちゃん、早く終わらせてギルド抜けて自由に暮らそ！」

「静かにしたいんだけどな…まあいいが。さて、遊撃戦だよ？ お妖前たち」

会話が終わったところから戦場には霧がかかり、彼の周りにあった青白く薄い光たちは霧の中に入って行き、霧の中からは青白い光が漏れ出していた

数分後、霧が晴れたところには片方のギルドの者たちは 全滅気絶していた

1話（後書き）

誤字、脱字、アドバイスがありましたらよろしくお願ひします。

主人公の名前次の投稿までお待ちしています

2話(前書き)

気分投稿

2話

いまさらだがこの大陸の名前はモルベジア

そして俺が今いる国はレカル王国、勇者が治める勇者が作った国だ。

今日勇者の術者が召喚されるらしい、準勇者勇者の術者とは初代勇者が行った召喚術を使用し、初代勇者と同じ考えを持つ者が召喚される。そして召喚された人物が準勇者だ

準勇者はその時にいた勇者が死んでしまったときに次の勇者になる。つまり国を治めることができる

しかし、能力が付いていないと術者になることもできやしない。…… 武術の達人だったらなれるが。

と、言ってみるが実はそう困ったことではない、もともと俺たちがいたところを10とすると準勇者たちは3、この人たちは1、数字が多いほど能力が生まれやすい。1000人中ね？

困ることがないのは、絶対に能力が付く人しか召喚されないのだ。

ちなみに、召喚されているのは今まで全部日本人だけである。

そんでまあ、ここに来たのは、その準勇者の力がどれだけかかっていうのを調べに来た。それだけ、簡単でしょ？

なんでこんなことをしているかという……ただ単に依頼だからね
(笑)

依頼主は知りません。なんか極秘だ!!!とかギルドのマスターが言ってきたからわかんないんだよね。大方見当ついてるけどさ

「……………縁、聞いてたよな？」

「知らん、早く進めろ、時間がもつたいないよ」

「いつもいつも人の話聞いてないよねえ緑は「みどりって呼ぶな！」
はいはい、縁えんでしょ、縁」

「こらこら準じゅん也君、縁をいじめちゃだめでしょ！」

「え？兄さんってお兄ちゃんいじめてたの？消すよ？」

「…兄さんひどい。お姉ちゃんに消されちゃえ」

「あつバカ兄消すの？おれも参加させてもらっわ」

「えええ！？ちょ！亜美あみ姉何言ってくれてんの！？理彩は勘違いしないで！？祐樹ゆうきもね！最後に縁！なに俺を消そうとしているの！？」

「やっぱバカ兄と喋ると時間がもつたないよ、いや、生け贄時間
逆流魔法使えばそうでもないかも……検討しておこう」

「…兄ちゃん誰を生け贄にするの？」

「あらあら？やっぱ準也君？」

「そうじゃない？それ以外に生け贄候補いたっけ？」

「おい、いい加減にしろよおまえら……」

と愉快的な会話が日常である
うん、いきなりで意味わかないね！

説明しよう！ここに来たのは依頼ついでに5人兄弟の旅行目的なの

である！

だからこんな会話になっちゃったりするんだよね。うん
え？親はどうしたって？この世界に来てからどっかに旅行行っちゃ
ったんだよね。ひどいと思わない？どっかの貴族になったらしいけ
どさ

「……はあ、まあとりあえず解散、縁は理彩にでも聞いといて？」

「うんうん、私は祐樹君とお店を回ったりしてくるわね」

「…行ってきます」

「了解、行ってらっしゃい」

「またあとでね？」

こうして今日が始まった

2話（後書き）

誤字、脱字、アドバイスありましたら、できればお願いします

3話

「……………みんな行ったか、それで？準兄いは何て言ってた？」

「お兄ちゃんっておかしいよね。兄さんに対して、ん、もしかしてツンdちよつとまって!!？左手に持つてるナイフ危ないから!!
じよ、冗談だからね!？」

「……………はあ、どうして似てなくていいとこが似るんだろ。いつそのこと消してしまおうか」

この家族、主に女は人を弄るのが好きなのだ。現に準也は初めに亜美に弄られていた。

「いや、消すのは冗談では済ませれないからね。あと目的覚えてる?」

「『範囲、目の前の人間、記憶、会話の内容、コピー、送信、受理、完了』日差しの宿に8時に集合か」

縁の声が範囲から完了まで無機質な声に変わり、その時間だけ周りが止まっているように見える錯覚を理彩は感じた。

「いつになっても恐ろしいね、お兄ちゃん的能力は、何なのか全然分かんないし」

「……………恐ろしいのか。」

そう呟いた縁の言葉を理彩は聞いていなかった

「…とりあえず、勇者の召喚儀式に立ち会つか」

目的、今回の召喚時間は12時、現在の時間は11時18分、詠唱開始時間11時50分

準勇者が召喚できる時期、時間は決まっっていて季節の終わりの日にしか召喚はできない

一年365日ではなく1461日これが一年だ。もといた世界の一年がここでの季節なのだ
今の季節は春、春は12時にしか召喚できないし年齢は高校生くらいが多い

実は召喚される日は非公開だったりする。

「そうだね、…：…なんか怒ってる？祐樹みたいに間ができるのをお兄ちゃんの癖だよ？」

縁は何も言わず歩いていく、それが彼女には珍しくネガティブな感情にさせてしまった

「（なんで？なんで？また3年前と同じ？私は迷惑なんて掛けたくないのに、好きになっちゃったお兄ちゃんを助けたかっただけなのにナンド？カゾクヲタスケテクレタトワノオレイヲシタカタダケナノニナンデ？）」

「『範囲、目の前の人間、一部記憶、削除、最適化、完了』…：何やってんだお前は」

「ふえ？あれ？あ、そっか召喚の儀式に立ち会ったっけ？行くところお兄ちゃん！」

「ふふ、お前は元気なのが一番だよ」

彼の袖を持ちながら走りだす理彩。

そのまま行けば雰囲気は崩れなかったのだが次の言葉で崩れ去ってしまった

「お兄ちゃん笑い方女っぽいよ？」

「うるさい、仕方ないだろ父さんもこう笑ってたんだし」

二人は準勇者が召喚される勇者の城地下の召喚の庭に向かって歩いて行った

3話（後書き）

縁「ダメ作者が……話が全然進まないぞ」

作「黙秘権を行使します」

縁「『対称、作者、本音、発言』」

作「いや実はこの作者言葉全然知らないバカだからさ」

縁「ほう？それで？」

作「前に書いたフェアリーテイルのあれとか他の小説のパク「バーン！」」

縁「誰かが来たみたいだけどまあ今の作者は遊んでいたのです」

？「あつそうそう作者って中学n」バタツ

作「なんでもありませんよ？」

茶番終了

感想、誤字、脱字、アドバイスがありましたら、お願いします

4話

今の時間は11時57分詠唱が終盤に入って行くところだ

「しかし絶対にここは庭じゃないよな」

「うん、お兄ちゃんに同感だよ」

今俺たちがいるのは召喚の庭……いや、召喚の場だな
言い直した理由はここの中をよく見ればわかる。

前 詠唱してる少女が一人と勇者、勇者の術者と貴族たち
後ろ 真っ白な壁
右 真っ白な壁と扉
左 真っ白な壁と扉
上 真っ白な天井
下 真っ白な床

いやいや、本当にここは庭なんですか？
詠唱してる少女 意外と知りあい の斜め前の床には
高純度の魔晶石が埋め込まれているしさ
周りの白い石 正式名称がない だって魔力を多く含
んでるし

「っと、予定より20秒早いけど詠唱が終わるのか」

□

！！！』

なんか聞き取れない言葉で詠唱が終わり、あたりが光に包まれる。

ダンッ！×5 スタッ

「痛あ！」「っ！？」「きゃ！」「いてっ！」「おっ」と

「いてて……こごとこだよ？」

「おお！！今回は5人も来られたぞ！！」

「……」
「……」
「……」

一人だけ遠い声で喋っていた……うん、昔の記録からも情報がなかった。彼は幽霊か何かなのか？

「『範囲、召喚された者、種族、検索、完了』化け物かよこいつらは……」

「お兄ちゃん……召喚された者って何人いたと思ってるの？処理が間に合わなくて死ぬよ？」

「理彩……この部屋の外に干渉できるのはあそこの少女だけだった
忘れたかバカ」

「バカ言うんなん！？」

「大声を出すな、ほら勇者様が気づくところだっただろ」

「ぶはぁー、わわわかったから、左手に持ってるナイフ…こちらに向けないでくださいハイ」

理彩にはうるさくしてもらうつと困るので少し黙ってもらった。一瞬こっちに召喚の巫女の目が動いたな、こっちに勇者を気づかせるなよ危ないところだったぞ？

「で？ここはどこなんだ、はっきり答えやがれ」

「だめだよ陸也そんなケンカ売っちゃ」

「ハハハ、喧嘩ですか？そんなことはしないでもらいたいですな。まあこの子達に説明は任せていますので私たちはこれで…」

そんなことを言って貴族たちは出ていく

「すまないな、ミナ、喜咲、おれも仕事があるから任せたぞ」

「わかりました」「了解しました」

返事を聞いて満足したのか勇者は部屋を出ていく

「んで？ここはどこで何の目的で来たんだ」

「ここはモルベジア大陸のレカル王国という場所であなたたちがいたところではないと言っておきます」

ミナがほんの少しだけ説明する。それに続き…

「先ほど申し上げましたがここはレカルという国です、レカルは勇者が治める勇者が作った国で都合のいい箱庭をつくったともいわれています。今現在、魔物と人間の対立が行われています。それを今代の勇者と魔王の契約により現在は停戦状態なのです。それでも魔物がこちらにあふれてくるので殲滅してきてもらいたいのです。できますよね？できるはずなんです。というわけで私たちの魔物殲滅計画に協力いただきたいのです。まあ逃げるという選択肢もありますが運命の泉と呼ばれている場所で能力というものを発現してからの方が逃げやすいですよ？でも逃げたらこちらから捕獲しに行きますのでその間はのんびりお過ごしください。」

「ええと、…そうなんだ。わかった」

会話の内容は聞こえていたが厄介な説明役を喜咲という子に任せようだ。

今代の勇者は青木大輔、前回の勇者を倒して国の長になった。楽しみたくて貴族制度などで少し遊んでいても国がいい方向に行く、治めていく才能がある

今代の勇者の娘 青木喜咲、目的は絶対に果たそうとするがその時の性格、凶暴性により周りからは遠ざけられている

「運命の泉ってところに連れてってくれる？能力だっけ？それがないと逃げにくそうだし」

考え事の間は大分話が進んだようだ、しかし今回の準勇者は逃げる
こと前提で始めるのかが分からないな。勇者だって召喚された時す
ごい喜んでたし

とりあえず左に見えた部屋に6人（幽霊君含め）は入って行った。

4話（後書き）

あれ？更新ペースの様子が？……………おめでとう！更新ペースは遅く
なつた！！

縁「なんでこうなつた」

作「学校厳しいです 結論」

縁「本音は？」

作「学校厳しいしこの小説が自由すぎて何も思い浮かばないんです」
縁「そうか」スタスタ

茶番終了

誤字、脱字、アドバイスなどできれば、できればいいのをお願い
します

前書きいりますかね？携帯だと鬱陶しかったので後書きにまとめま
したが

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6626w/>

別の世界

2011年10月25日02時05分発行